

初級日本語オンデマンドコースの開発と検証

— スクーリングの有効性に着目して —

沖本与子・工藤嘉名子・伊達宏子・伊東克洋

キーワード：初級日本語オンライン教材、オンデマンド教材、スクーリング、
オンライン版「ともだち」

1. はじめに

本稿は、2022年夏に実施された初級日本語オンデマンドコース（試行）について述べる。今回の試行では、日本語初学者及び初級レベルの日本語学習者に対し、TUFS Moodle2（以下「Moodle」）の環境で日本語オンデマンドコースを提供し、学習者・参加した日本人学生（以下「TA」）・関係者からの評価、フィードバックを基に、現在開発中の教材およびコースの検証を行うことを目的とする。またオンデマンドコースにスクーリングを組み合わせることで、セルフラーニングに留まらない学習効果を模索することも目的の一つである。そのため、プログラムに参加した日本語学習者、TAがスクーリングを通して得た学びに着目し、スクーリングの有効性についても検証する。

2. 日本語オンデマンドコース開発について

東京外国語大学（以下「本学」）では、2021年度より日本語オンデマンド教材・コースの開発¹を進めている。現在開発中の初級日本語オンライン教材は、本学の留学生日本語教育センターで開発した初級日本語教科書『大学の日本語 初級 ともだち』をデジタルコンテンツ化したオンデマンド教材である²。本稿では便宜的に、元の教科書を「書籍版『ともだち』」、オンデマンド教材を「オンライン版「ともだち」」と呼ぶ。オンライン版「ともだち」は、将来的に本学の海外協定校をはじめ、国内外の大学に所属する日本語学習者を対象としたオンデマンド型（セルフラーニング型）の日本語コースとして提供できるよう、Moodleでパッケージ化している³。

オンライン版「ともだち」は「初級1」「初級2」に分かれており、書籍版『ともだち』のVol.1・Vol.2にそれぞれ対応している。また、コンテンツも書籍版の内容に対応しているが、Moodleの機能や推奨動作環境などに合わせ、動画やH5Pコンテンツ⁴といったオンライン学習に適した形式

¹ オンデマンド日本語教材・コース開発は、本学の「アクションプラン 2021-2022」の一環として進められているものである。（<http://www.tufs.ac.jp/abouttufs/president/actionplan/>）

現在、筆者ら4名の日本語教員とITの専門教員1名を中心に開発を進めている。

² 書籍版の二次利用にあたっては、著作者や出版会など関係者の許諾を得ている。

³ 学術認証フェデレーション（通称「学認」）に加盟している国内の大学に在籍する学習者に向けては、Moodle for Open Educationを用い、それ以外の学習者に向けては、本学のOpen Academy Moodleを通して、コースを提供していくことを検討している。

⁴ 「H5P」はMoodleに実装されているオープンソースのプラグインソフトウェア「HTML5パッケージ」の通称である。インタラクティブビデオやフラッシュカードといったH5Pの機能を使って学習コンテンツを制作している。（<https://h5p.jp>）

に変換してある。オンライン版「初級1」教材については、2022年度春学期に本学の全学日本語プログラム⁵の初級1レベルのクラスにおいて、コンテンツの一つである文型学習動画を授業の事前学習用教材として使用し、オンデマンドでの動画視聴の有用性が確認できた（工藤・伊東・西島2022）。今回の試行では、Moodle環境で日本語オンデマンドコースを提供し、教材およびコースの検証を行うことを目的としている。

3. 本試行におけるコース設計

3.1 コースの設定と到達目標

今回の試行では、オンライン版「ともだち」の「初級1」（全12課）を3課ずつの「ユニット（Unit）」に分け、ユニット1（第1～3課）とユニット2（第4～6課）の2ユニット（計6課）の試行を行った。ユニット1は「日本語を勉強したことがない者または学習期間（独学含む）が1か月未満の者」を対象とし、ユニット2は「ひらがな・カタカナの読み書きが概ねでき、学習期間（独学含む）が3か月未満の者」を対象とした。コース名は「オンデマンドで学ぶ日本語 初級1（Let's Learn Japanese on Demand: Elementary 1）」とし、参加者の日本語レベルに合わせてユニット1、ユニット2のいずれかで学べるようにした。なお、スクーリングでは参加者はそれぞれのユニットに応じたタスク活動を行ったが、Moodleでは全員ユニット1・2の全てのコンテンツが自由に利用できるようにした。

書籍版『ともだち』は、共通評価指標「JLPTUFS アカデミック日本語 Can-do リスト（略称：AJ Can-do リスト）」⁶に基づき開発された「タスク型初級日本語教材」（藤森2016）で、Vol.1の到達目標はAJ Can-do リストの「初級前半」、Vol.2の到達目標はAJ Can-do リストの「初級後半」に相当する。また、各課にはタスク活動に対応した「タスク Can-do」が設定されている。一方、オンライン版「ともだち」は、受講生のレベルや開講期間に応じて柔軟なコース提供が可能になるよう、前述のとおり、3課ずつのユニットを単位としている。そのため、各ユニットの到達目標（以下「ユニット目標」）を書籍版『ともだち』よりも細かく設定する必要があった。そこで、書籍版のタスクおよびタスク Can-do をもとに、「読む」「聞く」「書く」「話す」「やりとり」の技能別にユニット目標を設定した。ここでは、本試行の対象であったユニット1・2のユニット目標を紹介する。

各ユニットのユニット目標および対応する技能、タスクは、表1、表2の通りである。表内の「S」は Speaking、「I」は Interacting、「L」は Listening、「R」は Reading、「W」は Writing を指す。試行コースでは、表1・表2を英語に訳したものを、ガイダンス等で参加者に配布・説明した。なお、「対応タスク」は Moodle の「課題」として配信されており、参加者は各自オンデマンドでタスクをやって提出できるようになっていたが、スクーリングでは、これらのタスクを対面に見合った教材・活動にアレンジして実施した。

⁵ 本学の学部正規生をはじめ、海外協定校からの交換留学生などが学ぶ日本語プログラムである。（http://www.tufs.ac.jp/student/international_student/Japanese_Program.html）

⁶ 東京外国語大学全学日本語プログラム（JLPTUFS）の教育内容に基づく共通評価指標。初級前半～超級の8レベルについて、「読解」「聴解」「文章表現」「口頭表現（独話・対話）」の技能別に Can-do 目標が記述されている。（<http://www.tufs.ac.jp/institutions/jlc/jlcmaterials.html>）

表1 ユニット1 (U1) : ユニット目標および対応タスク

U1 ユニット目標	技能	対応タスク
U1-1 「はじめまして」「どうぞよろしく申し上げます」という挨拶表現を使って、自分の名前・出身・専門について、自己紹介できる	話す (S)	L1 タスク 1
U1-2 次のトピックについて、習った文型を使って質問したり、質問に答えたりできる □名前、出身 (国)、専門 (～は何ですか) □大学の建物の場所 (～はどこですか/～は {ここ・そこ・あそこ} です) □食堂のメニューと値段 (～はいくらですか・～円です) □毎日の習慣 (何時に～します (か) /どこで～します (か))	やりとり (I)	L1 タスク 2 L2 タスク 1 L2 タスク 2 L3 タスク 3
U1-3 毎日の習慣についての1分程度の話を聞いて、内容に関する質問 (選択肢問題) に解答できる	聞く (L) 読む (R)	L3 タスク 5
U1-4 ひらがなとカタカナを使って、100字程度で、自分のプロフィール (名前・出身・専門) が書ける	書く (W)	L1 タスク 1 (応用)

表2 ユニット2 (U2) : ユニット目標および対応タスク

U2 ユニット目標	技能	対応タスク
U2-1 名前、出身、所属、好きな食べ物、週末によくすることについて、30秒程度で自己紹介ができる	話す (S)	L4 タスク 5
U2-2 次のトピックについて、習った文型を使って質問したり、質問に答えたりできる □好きなスポーツ・食べ物・飲み物・動物 (どんな～が好きですか・好きな～は何ですか/～が好きです・～です) □大学/日本の生活、日本語の勉強についての感想 (～はどうですか・ とても・少し Aです) □休みの日にしたこと・感想 (どこへ行きましたか・何をしましたか・どうでしたか/～へ行きました・～をしました・Aでした) □品物の値段と個数 (店での注文) (～は一ついくらですか・～を～つください/ 一つ・全部で ~円です)	やりとり (I)	L4 タスク 1 L5 タスク 2 L5 タスク 3 L6 タスク 4
U2-3 「日本の国土」について書かれた150字程度の文章が正しく音読でき、国土構成や人口、首都などについての質問を聞いて正しい答えを選択できる	読む (R) 聞く (L)	L6 タスク 5
U2-4 自国の位置や気候、人口、有名な場所、名産などについて、200～300字程度の文章を書いて、発表できる	書く (W) 話す (S)	L6 タスク 5

3.2 学習コンテンツの概要

オンライン版「ともだち」の学習コンテンツには、①会話練習、②文型学習⁷、③ Grammar

⁷ 文型学習動画には文型編、活用形編、語彙編の3種類がある。オンライン版「ともだち」の「初級1」には、文型学習動画が計49本ある。このうち、ユニット1・2は、それぞれ13本ずつで、1課あたり3～5本となっている。ユニット1・2の動画の長さは、最も長いものでも20分である。

Notes、④文型練習、⑤漢字学習（L5以降）⁸、⑥タスク、⑦レッスンクイズがある。今回の試行では、①～⑥を学習コンテンツとして Moodle で提供した。このうち、②文型学習と⑤漢字学習はスライドショーによる動画であるが、①会話練習、③ Grammar Notes、④文型練習は H5P で作成してある。⑥タスクは Moodle の「課題」機能を使って作成してあり、録音機能も備わっている。

ここでは、H5P の機能を使って作成した①会話練習と④文型練習の例を紹介する（図1）。①会話練習はどの課も H5P のインタラクティブビデオを使って作成してあり、会話のアニメーション動画のほか、会話表現・日本文化についての英語解説があり、リピート練習やロールプレイも可能になっている。④文型練習は、インタラクティブビデオをはじめ、ダイアログカード、ドラッグ&ドロップ、フラッシュカードなど、それぞれの練習に適した形式を用いて作成してあり、変化に富んだ練習が可能になっている⁹。また、音声を聞いたりヒントを参照したりしながら学習を進めることができ、即時フィードバックもあるため、自学自習に適している。

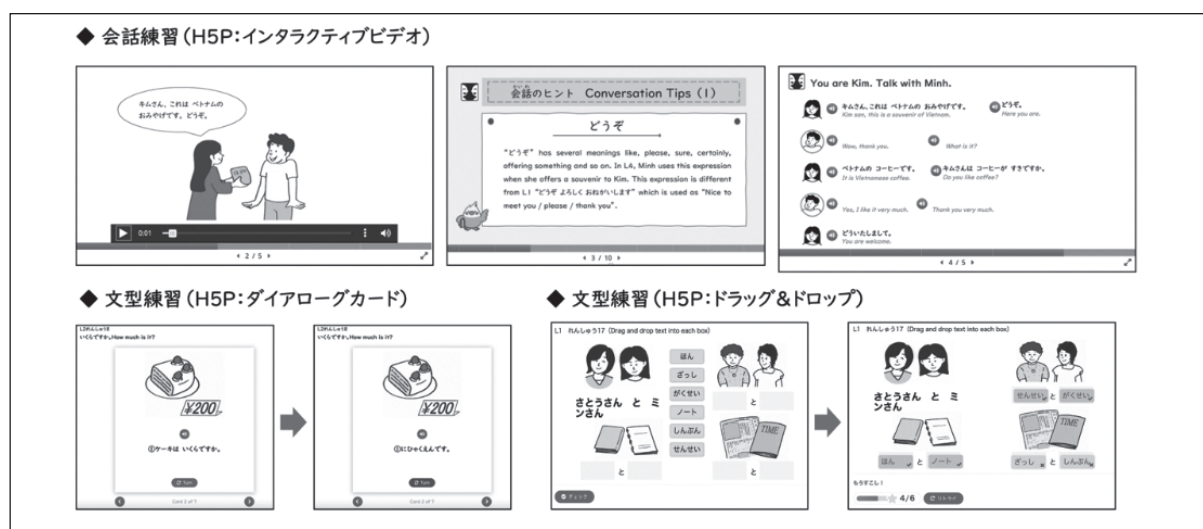


図1 H5P を用いて作成したコンテンツの例

なお、本試行では、事前学習用にひらがな・カタカナのオンデマンド教材を Google ドライブ で配信した。配信した教材は、日本語の文字についての説明動画、ひらがな・カタカナ筆順アニメーション動画、ワークブックである。

4. 試行の概要

4.1 コース概要

本試行は Moodle によるオンデマンド学習と、対面によるスクーリングを組み合わせ、2022年8月24日～9月20日に実施した。対象者は本学に所属する留学生かつ日本語学習に興味がある学生とし、学部・大学院を問わず募集を行った。その結果、以下の学習者が参加登録をした。表3は参加者の属性である。なお、選択コースについては、事前のアンケートにおいて日本語学習歴、文字学習歴の有無を基に運営側で判定し、参加者へ連絡した。

⁸ 漢字学習動画には各漢字の説明（音訓・意味・語彙）と筆順アニメーションがある。漢字は第5課から導入されるため、ユニット2のコンテンツとして4本の漢字学習動画を配信した。

⁹ 文型練習のコンテンツ数は、「初級1」全体では91ある。このうち、ユニット1は42、ユニット2が39と、1課あたり11～17となっている。

表 3 試行の参加者

	参加者	身分	スクーリングへの参加形態	選択コース
1	参加者 A	学部生	対面	Unit 2
2	参加者 B	大学院生	対面	Unit 1
3	参加者 C	学部生	オンライン	Unit 2
4	参加者 D	大学院生	対面	Unit 2
5	参加者 E	大学院生	対面	Unit 1
6	参加者 F	大学院生	対面	Unit 1
7	参加者 G	大学院生	対面	Unit 1
8	参加者 H	大学院生	対面	Unit 1

また、参加者から事前にコースへの要望を確認したところ、以下のような声が上がった。特に日本語初学者から文字学習と日本語での表現について学習したいとの希望が出されたことが確認された。

参加者 B: Please, I need help with reading Hiragana and Katakana characters. I'm so eager to speak Japanese. Thank you for the opportunity.

参加者 F: I would be much better if we can get an opportunity to learn and practice daily used Japanese expressions.

本試行では、オンデマンド学習の成功を目標とし、参加者への手厚い支援のため、本学国際日本学部所属の日本人学生3名をスクーリング時のTAとして配置し、日々の学習への疑問については教員と日本人学生1名がメールによる質問に対応できるように整備した。これらの体制については初日のガイダンスで参加者へ周知することで参加者の情意フィルターを下げるようにした。コースのスケジュールは、「3.1 コースの設定と到達目標」に既述したように、書籍版『ともだち』にあるタスクを基にL1～L3、L4～L6をそれぞれ4週間で学習し、週1回のスクーリングでユニット目標に基づく技能の練習・確認を実施するよう組み合わせてある。表4は運営側から参加者へ一例として提示した学習計画でありガイダンス資料からの抜粋である。

表 4 各週の学習プラン (Recommended Study Plan)

W	Unit 1	Unit 2	Instructors/Tutors
Pre	Hiragana and Katakana Pre-Study	Hiragana and Katakana Pre-Study	
W1	Study L1, Task 1, 2	Study L4, Task 1, 5	Study support・Schooling
W2	Study L2, Task 1, 2	Study L5, Task 2, 3	Study support・Schooling
W3	Study L3, Task 3, 5	Study L6, Task 4, 5	Study support・Schooling
W4	Profile completion	Presentation	Study support・Schooling
Post	Check the Can-do list, questionnaire, etc	Check the Can-do list, questionnaire, etc	Interview (feedback)

(ガイダンス資料4ページから抜粋)

まず2022年8月24日に実施したガイダンスでは、教員・TAの紹介に続き、Moodleの使い方、教材の所在、学習方法などについて説明した。参加者は各自パソコンを持参し、教員またはTAのサポートのもと、Moodleへのアクセス方法、教材・クイズ・タスクの使用法を中心にコンテンツの使い方を確認した。

学習者は各自オンデマンド学習に取り組み、1週間に1回対面方式のスクーリングに参加した。スクーリングは8/30, 9/6, 9/13, 9/20の計4回実施した。いずれの日も10:00-11:00または13:00-14:00の時間枠を設け、参加者のスケジュールに合わせて調整できるように設定した。国外にいる参加者はオンライン参加となり、予めZoomを設定し、本人が選んだ時間帯にスクーリングに参加するようにした。なお、スクーリングを行った会場にはプロジェクターとパソコンを2台用意した。パソコンは1台で、スクーリング会場にいる参加者全体を映し、もう1台をオンラインでの参加者とTAまたは教員が交流できるように用いた。

TAには日本語教育に興味がある、または留学生との交流に興味がある日本人学部生ボランティアを募集し、3名の学生がTAに応募した。TAはグループワークまたは個別活動の際に、状況に応じてグループでの活動説明や活動パートナーになり、参加者の円滑なスクーリングを支援した。全員英語に堪能であり、参加者と日本語と英語を交えた意思疎通を行った。

4.2 使用教材

本コースの実施にあたり、オンライン版「ともだち」を基に開発したMoodle上のオンデマンド教材を主軸とし、スクーリング用にタスクを遂行する資料を作成した。一例として、2022年9月6日に実施した2回目のスクーリングで用いた資料を掲載する(図2)。

September 6th (Tuesday) 10:00-11:00 or 13:00-14:00

Unit 1

1. Direction: Talk with teachers, TAs, other students as many as possible.
After you talked, please get the signature from them.
2. Task: UI-2 Can ask and answer questions about the following topics using the sentence patterns learned
3. Materials: Campus map, Menu
4. Sample

With Roma-ji	Without Roma-ji
<input type="checkbox"/> Name, hometown(country), major Nは何ですか <i>What is N?</i> N wa nandesuka N = おなまえ、おくに、せんもん etc onamae, okuni, senmon	<input type="checkbox"/> Name, hometown(country), major Nは何ですか <i>What is N?</i> N = おなまえ、おくに、せんもん etc
<input type="checkbox"/> Location of the university building A: Nはどこですか <i>Where is N?</i> N wa dokodesuka B: Nは{ここ・そこ・あそこ}です N wa {koko·soko·asoko} desu <i>N is here/there/over there</i>	<input type="checkbox"/> Location of the university building A: Nはどこですか <i>Where is N?</i> B: Nは{ここ・そこ・あそこ}です <i>N is here/there/over there</i>
<input type="checkbox"/> Menu and price at the cafeteria A: Nはいくらですか <i>How much is N?</i> N wa ikuradesuka B: ~円です <i>it's ~yen</i> ~en desu	<input type="checkbox"/> Menu and price at the cafeteria A: Nはいくらですか <i>How much is N?</i> B: ~円です <i>it's ~yen</i>

図2 2回目のスクーリング：Unit 1の学生用資料

Unit 1の参加者は日本語初学者であり、文字学習の習得差があるため、資料にはひらがなとローマ字読みを併記した欄と、ローマ字読みのない欄を作成した。参加者ははじめローマ字読みを用いて活動を行っていたが、次第にローマ字読みのない欄を使用するようになった。スクーリングの活動ではできるだけ多く日本語で発話することを目標としており、パートナーとなる指導教員・TAを変えながら、できるだけ多くの日本語母語話者と会話を続け、日本語での発話を維持するために、資料に「get the signature」欄を設けた。参加者と話した教員またはTAがサインを入れ、多くのサインが集まることで、参加者は発話数の多さを確認でき、達成感と自己肯定感が得られることを目指した。

5. スクーリングの様子

スクーリングは、4.1 節で述べたように 4 週にわたり火曜日に実施し、TA3 名と教員複数名でシフトを組み会場に集まった参加者（オンライン参加者を含む）の学習をサポートした。各回のレッスンプランは第一著者が立て、TA と教員（第二～第四著者）に共有された。

スクーリングの目的は、1) 実際に（またはオンライン上で）会うこと、2) 日本語を話せたという経験を重ねること、3) できるだけ気楽・気軽に実施すること、4) オンラインで学習し、スクーリングで分からないことが解決できること、5) オンラインで学習しつつ、対面で会うことの意義を確認すること、とした。

スクーリング後は、Google Forms を用いて作成した振り返りシートに、参加者と TA がその日の活動内容や、活動時に気づいたことを記入し、教員らと共有することで、次回以降のスクーリング実施方法の改善につなげた。次節以降に、TA・教員が共有したスクーリングのレッスンプランの一部を記載し、特に 1 週目と 4 週目のスクーリングの様子を写真や TA の気づきとともに紹介する。

5.1 スクーリング 1 週目

スクーリングでは、まず初めに当日の活動の流れについて教員から全体に向けた説明が行われた。続いて、1 週目はアイスブレイキングとして、ひらがなビンゴ、ひらがなカルタ読みの活動を実施した。一部の参加者は仮名の読み書きの定着が未だ不十分であったため、オンデマンド教材の自律学習の促進のため、1 週目と 2 週目は仮名練習を取り入れた。音を聞いて文字を認識する練習として、TA がカルタに書かれたひらがなを発音し、参加者がビンゴシートの文字を探して○で囲んだ。参加者の座る各テーブルから、列が完成した「ビンゴ!」の声があがり、盛り上がった。次に、カルタが置かれているテーブルの傍に全員集まり、文字を見て音を産出する練習として、ひらがなカルタ 1 枚を TA が取り上げ、書かれた文字を参加者が発音した。その後、TA と参加者とで、カルタの裏に書かれた、当該文字を使った物の絵とその名前を確認した（例：「とけい」の「と」）。その後、Task プランに沿って自己紹介の表現を確認し、参加者同士や TA・教員と自己紹介をし、参加者が話した相手からサインをもらう活動をした。以下、1 週目に使用した TA・教員用資料（図 3）及び、ひらがなビンゴシートのサンプル（図 4）、ひらがなカルタ読みの活動時の様子（図 5）を資料として掲載する。

“Let’s Learn Japanese on Demand! Elementary I” Materials (教師・TA 用)

August 30th (Tuesday) 10:00-11:00 or 13:00-14:00

総当たりで、その場にいる、教員、TA、学生同士で、全員とあいさつをし続ける

教員、TA はできるだけ話を伸ばす

内容:

Unit1 参加者用	Unit2 参加者用
L1, Task1, p20 「はじめまして」「どうぞよろしくお願いします」という挨拶表現を使って、自分の名前・出身・専門について、自己紹介できる Sample: サンプルを学生に見せる はじめまして。 わたしは(name)です。 (country name)から きました。 [ISEP/PCS/共サスの がくせいです] わたしの せんもんは (major)です。 どうぞよろしくおねがいします。	L4, Task 5, p78 名前、出身、所属、好きな食べもの、週末によくすることについて、30 秒程度で自己紹介ができる Sample: サンプルを学生に見せる はじめまして。 わたしは(name)です。 (country name)から きました。 わたしの せんもんは (major)です。 わたしは (food / drink)が すきです。 わたしは にちようびに よく ()。 どうぞよろしくおねがいします。

Additional expressions

*~は日本語で何ですか

*もう一度、お願いします

図3 スクーリング (8月30日実施) のTA・教員用資料

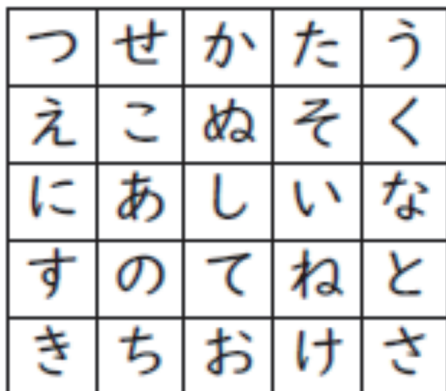


図4 ひらがなビンゴシート



図5 ひらがなカルタ読みの活動の様子

TA による活動の振り返り、気づきには以下の点が記述された。

- ・活動前に、Fさんが私の名前を呼んで、ひらがなの練習をしたとプリントを見せてくれたことが非常に嬉しかったです。また、「Aは日本語でなんといいですか」の部分ではいろいろと身の回りのものの名前を聞いてくれたり、メモして覚えようとしていたりしたことが印象的でした。
- ・ゲームをしたり自己紹介をしたりしながら、気づいたら楽しく自然に会話ができている。お互いに、使える日本語にはかなり制約があるなかで、文字や英語を使うなど試行錯誤しながらコ

コミュニケーションができたことが印象に残った。

- ・ビンゴは先生がランダムに文字を選んでいく方式でしたが、少人数だったので学習者も合わせてみんなで順番に一つずつ選んでいくようにしてもよいのではないかと思いました。学習者も選ぶことで、「自分がビンゴを作るためにどのひらがなを自分は選ぶとよいか」というように、より一層ひらがなの形に注目することができるのではないかと思いました。

以上のように、TAも参加者の学習の成果に喜びを感じ、より良い活動形態を考えるなど、活動に積極的に関わろうとする姿勢が示された。

5.2 スクーリング 4週目

4週目の最終週は、発表会として、前半は各自、自己紹介や自国の特徴について説明するスピーチ原稿をTAや教員のサポートを得ながら完成させ（図6）、後半はそれに基づいて全員の前に出て発表した（図7）。オンライン参加者も各発表者の発表する様子がZoom越しに見えるように、webカメラの位置を調整したり、オンライン参加者の発表の様子も全参加者が見えるように、会場の前面のスクリーンにPCのZoom画面の映像を投影するなど、会場の参加者・オンライン参加者双方の一体感を出すよう工夫した。発表者は発表後に全員から拍手を得、会の最後には修了書を授与され、達成感を感じた様子であった（図8・9）。

September 20th (Tuesday) 10:00-11:00 or 13:00-14:00	
Greeting Ice breaking:週末何をしたか話をする	
Task	
書く活動:最初に時間をとり、書く活動をする 一人ずつ教員・TAがつき、修正する	
教員・TAを変えて、プレゼンテーションの練習×2	
話す活動:全員に向かってプレゼンテーション 教員・TAからのコメント	
準備物:Unit1&Unit2用の用紙(オンラインの人はWord)	
内容:	
Unit1 参加者用 [書く⇒発表]	Unit2 参加者用 [書く⇒発表]
L1, Task1, p20 ひらがなカタカナを使って、100字程度で、自分のプロフィール(名前・出身・専門)が書ける] 会って話した人からサインをもらう	L6, Task 5, p114 自国の位置や気候、人口、有名な場所、名産などについて、200~300字程度の文章を書いて、発表できる。 会って話した人からサインをもらう
Essay:	

図6 スクーリング(9月20日実施)のTA・教員用資料



図7 最終発表会の様子



図8 修了書授与

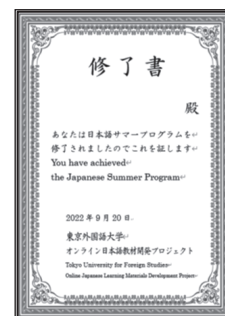


図9 修了書

TAによる活動の振り返り、気づきには以下の点が記述された。

- ・ Aさんが、ローマ字を介さずに、日本語で書いていたので感動しました。Fさんもですが、みなさん熱心に勉強なさっているのだと感じました。
- ・ 手書きで原稿を書く際に書き方が各々個性的だったことが印象的でした（「す」を、横棒、左払いの棒、丸に分けて書く、など）。書き順を教わる機会があればもう少し書きやすいのかもしれないと思いました。
- ・ 作文の指導をしている時、ローマ字からひらがなに変換していく際に、助詞の「は」はローマ字で「wa」と書いているため、ひらがなで「わたしわ」のように書いている学習者がいました。音は「wa」だけど「は」と表記すると教えると、完全に理解した様子ではありませんでしたが「は」に書き換えていました。初学者に助詞を教えるのは難しいなと感じました。
- ・ 日本語のレベルがみなさん様々なので、高いレベルの人の発表をそれ以外の人理解できているかどうか少し気になりました。自分より高いレベルの人を見てモチベーションが上がることももちろんありますが、辛く感じたり、発表の時間をつまらなく感じてしまったりしたらいけないなと思いました。

以上のように、TAから見た学習者の成長の様子や、TAも学習者の熱心さに応えるべく、具体的な教授方法や学習の支援方法に関心を寄せる様子が、記述から観察された。

6. アンケート・インタビューの概要と分析結果

6.1 アンケート調査の概要と集計結果

本試行のスクーリングに3回以上参加した3名の参加者（A,C,F）に対し、オンデマンド教材の使用感とスクーリングの有用性を調査するため、アンケートを実施した。アンケートは英語で行われたが、本稿では日本語に翻訳したうえで記載している。

まず、学習者の主な使用コンテンツは各参加者の学習動機に関連していることがわかった。例えば会話能力の向上を目的としていた参加者AとFは会話練習コンテンツを中心に学習を進めており、一方で既習項目の復習のために参加したCは文法の正確性を上げるために、文型学習動画と文型練習のコンテンツを主として学習を進めていた。

また、コンテンツの使用感としては、工藤・伊東・西島（2022）と同様に各コンテンツにおいて高い評価を得ており、日本語学習に非常に役に立ったというコメントが多く見られた。さらに、フォントや配色を含むデザインについても高い評価を受けていることがわかった。

次に、スクーリングについて見てみると、まず、「スクーリングが学習動機につながったか」という質問に対しては3人全員が「そう思う」と回答していた。さらに全体的な印象についても非常に良かったと回答しており、その理由として「クラス内のインタラクションのレベルが自分に合っていて、先生やTAのみなさんの支援も素晴らしかった」「オンラインで参加したが、非常に効果的だと思った」などのコメントが見られた。特に、スクーリング中における教員、TAからのサポートについては全員が非常に良かったという回答を行っていた。また、具体的に印象に残っている活動として3名全員がプレゼンテーションを上げており、「みなさんが公の場で日本語を話そうとするのを聞くのは、本当によかった」「短時間で新しい言語で何かを話すことができるようになるのは、とても刺激的で驚きだった」「すべての回が非常に楽しかった」というコメントが見られた。さらに、参加者3名ともにスクーリングが日本語学習の役に立ったと考えており、

「スクーリングで新しい知識を得ることができた」「オンデマンド教材で習ったことを復習することができた」というコメントとともに、実生活の接触場面等で学習した日本語を使用する機会があったという回答も得られた。

最後に「今後もオンデマンド教材を使用した学習を継続したいか」「またスクーリングに参加したいと思うか」という質問についても3名全員から「参加したい」という回答を得た。

6.2 インタビューの概要と分析結果

本試行の印象や感想についてより詳しく確認するため、参加者CとFにフォローアップインタビューを実施した。インタビューは教員2名と対象参加者1名の組み合わせで実施した。インタビューは1回30分程度および英語で行われたが、アンケート同様にインタビューの内容を日本語に翻訳したうえで記載する。

参加者Fは大学時代に交換留学生として一学期間日本語を勉強したが、帰国後数年で日本語を忘れてしまったため、記憶にある日本語のブラッシュアップを目的として本試行に参加した。また、前回の日本語学習はアカデミックジャパニーズの習得を目的としており、授業も文法の学習を中心としたもので、日常で使用できるような日本語を学ぶことができなかったため、今回は日本語で日常会話ができるようになりたいと思い、参加を決めたとのことである。そのためFがMoodleで主に使用したのは会話練習やタスクなど、会話の練習ができるコンテンツであり、実際「それらが自身の日本語学習に非常に役に立った」と述べていた。

Fはすべてのスクーリングにも参加しており、インタビューでも「スクーリングの雰囲気が非常によく、学習したことも練習できるため、参加を続けたいという気持ちになった」と述べていた。Fが参加を続けたもう一つの理由として、媒介語（英語）の使用がある。FはUnit1での参加であり、一度日本語学習にも躓いていたため、Fにとって日本語のみでコミュニケーションをとることは非常にハードルが高かったが、「教員やTAと英語で話をするができる」という安心感が継続的な参加への動機につながったと話していた。また、スクーリングでの具体的な活動もFのニーズに合っており、活動で学んだ内容を自身の生活で実際に使用することができたと話していた。Fはインタビューの最後に「この試行を通して自身が日本語で自分を表現できるようになったこと、そして日本語でコミュニケーションがとれるようになったことに非常に感動しているし、達成感を感じている」と語った。

参加者Cは来日前的ためオンラインでの参加であったが、来日後に実施される対面授業の前にこれまで学習した内容を復習したいというのが参加の理由であった。ただし、母国でサマーキャンプに参加したため、すべてのスクーリングには参加することができなかった。

参加者Cは復習として文法学習に焦点をおいていたため、特に文法動画を中心に学習を進めていたが、パターン練習を使用して練習を行ったり、部分的に会話練習も視聴したりしていた。特にパターン練習は英語を媒介とせず、ほぼ日本語で学習をすることができるのがよかったと話していた。参加者Cは、もともと言語学習は自分のペースで学習した方がよいという考えを持っており、試験や課題を含む通常の授業形式よりも、本試行で行ったオンデマンド形式が日本語学習に非常に効果的だったと述べていた。また、オンデマンド形式は自身で学習管理が必要なものの、前者で感じるようなストレスもなく、日本語学習に集中することができたと述べていた。参加者Cは実際に質問したことはなかったものの、常時Google Formsを通して質問を受け付けてお

り、それも安心して学習を進めることができた要因の一つになったようである。参加者Cは来日後にはオンデマンド教材やスクーリングで学んだことを使ってぜひ日本人と話をしてみたいとも語ってくれた。

7. 考察

本試行では、初級日本語オンデマンドコースの開発と検証を主たる目的とし、スクーリングの有効性の確認を行った。参加した日本語学習者のオンデマンド教材への関心・満足度は高く、用意されたコンテンツを自らの目的に合わせて活用していることが観察された。

また、スクーリングについては日本語学習者及び日本人学生の双方から対面で対話をするものの重要性、インタラクションを通しての発見、日本語を使うこと・日本語を説明することへのモチベーション維持について言及がなされた。「6.2 インタビューの概要と分析結果」でも分析しているように、スクーリングを通しモチベーションを維持できたことが、日本語学習者が実際の社会生活での日本語使用に繋がったことが確認された。

8. まとめと今後の課題

本稿では、まず、日本語オンデマンドコースの開発について、その経緯とコンテンツの現況について概観し、次に、2022年夏に実施した試行のコース設定と到達目標についてユニットごとに目標・技能・対応するタスクを説明した。また提供されている学習コンテンツの種類と内容についても例を載せている。続いて試行の参加者、TA・教員配置、スクーリングのスケジュールおよび使用した教材の一例をまとめた。その後、スクーリングの様子とスクーリング中・スクーリング後に得たアンケートとインタビューの分析を既述した。

本試行は、初級日本語オンデマンドコースの開発と検証のために実施した。オンデマンドコースにスクーリングを組み合わせることによる、日本語学習者への有益な学習形態の提供を目的としている。オンデマンド学習コンテンツへの一定の評価を得たことから、現在用意されているコースコンテンツの信頼性が確認された。また、アンケート・インタビューを通し、日本語学習者及び日本人学生からスクーリングに対し肯定的なコメントと、スクーリングによるモチベーションの維持についても確認することができた。

ただ、スクーリングの実施には場所・時間・人材の確保が必要であること、オンデマンド学習（セルフスタディ）で生じていた学習者の音と文字認識の不一致（「5.2 スクーリング4週目」より）への対応など、運用面での改善の余地があることが今後の課題である。また本試行については、参加人数が少ないため、今後オンデマンド学習とスクーリングを組み合わせたオンデマンド型コースへの参加人数を増やすことでプログラムの汎用性の確認をする必要がある。

（執筆分担：1・4・7・8 沖本、2・3 工藤、5 伊達、6 伊東）

参考文献

- 工藤嘉名子・伊東克洋・西島絵里子 (2022) 「学習者は事前学習課題としての文型動画視聴をどう受け止めたのか —初級日本語オンライン教材の開発に向けて—」『日本語教育方法研究会誌』 Vol.29, No.1, pp.12-13.
- 東京外国語大学留学生日本語教育センター編著 (2017) 『大学の日本語 初級 ともだち Vol.1・Vol.2』東京外国語大学出版会
- 藤森弘子 (2016) 「タスク型初級日本語教材の開発とその特徴 —学習者発話の形態素解析結果から—」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』 第42号, pp.13-28.

(おきもと ともこ 東京外国語大学世界言語社会教育センター 特任講師)

(くどう かなこ 東京外国語大学大学院国際日本学研究院 教授)

(だて ひろこ 東京外国語大学大学院国際日本学研究院 准教授)

(いとう かつひろ 東京外国語大学大学院国際日本学研究院 講師)

Development and Validation of an On-Demand Course in Elementary Japanese:

Focusing on the Effectiveness of Schooling

OKIMOTO Tomoko, KUDO Kanako, DATE Hiroko, ITO Katsuhiro

KEYWORDS: Online Japanese learning materials for beginners, On-demand learning materials, Schooling, *“Tomodachi”*

The trial summer program was conducted in 2022 Summer to develop and validate an on-demand course in elementary Japanese. The objective is to provide a beneficial learning format for learners of Japanese by combining on-demand courses with schooling.

In this paper, the development of the Japanese on-demand course, its background and the current status of the prepared content were overviewed. Then, the course setup and achievement goals for the trial implemented in the summer of 2022 are described for each unit, along with the goals, required skills, and corresponding tasks. Examples of the type and content of the learning content provided are also included. Following the information of the participants, the TAs and instructors' arrangements, schooling schedule, and a sample of the teaching material. Also, the description of the schooling, and an analysis of the questionnaires and interviews conducted during and after the schooling are summarized.

A certain level of evaluation of the on-demand learning contents was obtained, which confirmed the reliability of the course contents currently available. In addition, through questionnaires and interviews, we were able to confirm positive comments from Japanese language learners and Japanese students about schooling, and about maintaining motivation through schooling.